A R P A K ・ N E W S L E T T E R

アルパック ニュースレター

VOL182　2013 年 11 月 1 日 ISSN 0918-1954

華やかな三田だんじり祭り（本文中に関連記事があります）

目次／contents

寄稿

城はないけど城下町、高槻で町家を照らします
／マチヤ・テラス　岩崎卓宏 2

ひと・まち・地域

地域から少子高齢化への対応を考える（その４）～未婚率の低い日高町（和歌山県）に関する考察～　／森脇宏 4

きんきょう

上野千鶴子氏との公開対談をしました　／竹井隆人 6
授産所の新しい仕事！周藤さん、遠征して先生になる！　／廣部出 7
フォーラム「関西の食文化とフードツーリズム」が開催されました　／高田剛司
きっかけは、地域自慢を見直すこと　／森岡武 8
エネルギーシフトと地域づくりを訪ねる旅　／杉原五郎 9
アルパックの経営理念を策定し、イメージロゴも作成しました　／森脇宏 10

創設者に聞く

／インタビュアー　片野直子 11

まちかど

何気ない「聖地」・西宮北口　／坂井信行 12

arpak

寄稿

城はないけど城下町、高槻で町家を照らします

／マチヤ・テラス　岩崎卓宏

ようやく秋らしくなってきました、と言うか、いきなり冬になろうとしてないか！もうちょっと秋をたのしみたいなどと思いながら空を見るこの頃、みなさまいかがお過ごしでしょうか。

意外と知られていない高槻の町家

大阪府高槻市はれっきとした城下町です。城はすでにないのですが、街路や町家には名残があります。高槻と言えば、住むための町であり、緑豊かな北摂の衛星都市という印象が強いと思われます。歴史的な話では、古墳が有名。海外ではキリシタン大名、高山右近が知られている。つまり、今の高槻で町家を話題にする人はとても少ない。「ん？高槻に町家？そんなもんあったっけ？」というのが一般的で、京町家とか大阪長屋とか、他所の町家に関心があっても、高槻の町家には思い至らない。

実際はどうでしょうか。点在する形ではありますが、結構残っています。歴史景観がもてはやされるような街並みは稀少ですが、例えば旧城下町、西国街道芥川宿、酒造りで有名な富田というふうに、それなりに歴史あるまちがあれば、それなりに町家はあるものです。ところがどんどん町家は消えていく。この状況は他所のまちとまったく同じだと思います。

そこで、高槻のまちのどこにどんな町家がどんなふうに残っているのか、これを調べてみようと2008年秋に始めたのが「町家・まちなみ調査」です。ほんの少人数の市民活動であるマチヤ・テラスがトコトコとまちを歩きまわり、町に残る町家の外観調査を行い、町家の実態を把握していきます。例えば、旧城下町のかつての目抜き通りについて、通りの総延長に対する町家間口の合計の割合を算出した「マチヤ率」は概ね3割。これを多いと思うか少ないと思うか人によって違うと思いますが、でも、決して、「高槻に町家はない」と言い切るわけにはいかないことははっきりしたと思います。現在も、旧城下町と宿場町とでは町家の特徴に違いがあるだろうか？ということを分析してみたり、たのしみながら作業を続けています。そして、これらの結果は、高槻の「町家図鑑」にまとめようと作業中です。いつか形になった際にはご覧いただけるとうれしいです。

マチヤ・テラスの活動

マチヤ・テラスというのは、高槻市が2006年に行った「景観ワークショップ」の参加市民が、ワークショップ終了後も活動を継続しようと集まったのが始まりです。このワークショップのコーディネイトはアルパックが関わっていたので、担当者は私たちの立ち上げの様子も目撃していたわけで、以来、何かと気にかけていただいき、お世話になっています。

最初の活動は、知り合いになった築300年に近い江戸中期の町家をキャンドルで照らすことから始めました。2006年の冬至のころでした。たった一軒の町家を照らしてみる。いつもそこを通りかかる多くの人たちに、「きれいやなぁ。そういえば、あったな、こんな町家が」と気付いていただけたならよいなという思いでした。こうしてお付き合いが始まった町家にお住まいのみなさん。家だけではなく、住まい方やお気持ちも含めて「まちのたからもの」だと気付くのに時間はかかりませんでした。

マチヤ・カフェの様子

登録文化財・高槻300歳町家　明治時代には板垣退助さんも泊まったという

この夏のキャンドル点灯

とは言え、町家の維持は大変です。不便もあるし地震もこわい、お金も手間もかかる。ご苦労を思うと、うかつには「この町家を残してください」とは言えません。そこで、決して、私たちの思いを押し付けることはせず、お付き合いいただく中で、より一層、お住まいになっている町家のよさをいっしょに見つけて喜び合い、また、何かお手伝いできることがあれば、無償でこれに取り組みたいと思いました。町家とそこに住まうみなさんが主役で、私たちはその黒子に徹するというのが基本です。町家調査（マチヤ・トコトコ）やキャンドル点灯、町家の実測、町家での茶話会（マチヤ・カフェ）などを行いながら、常にまちの中にいて、まちの人たちと出会い語り合う。こうして醸成されつつある町家のみなさんとその支持者のつながりは、これから一体どこへ向かうのでしょうか。町家でがんばるみなさんが、がんばりやすいまちになっていけばよいのですが。

300歳の町家が登録有形文化財に

この夏、文化審議会の答申に173の建造物を登録有形文化財にする旨の記述がありました。その中の一軒にはじめにキャンドルを灯した高槻の町家がありました。ご自宅の町家としての意義を再認識なさったご当主が登録文化財にすることを数年前にご決心なさり、私たちもそのお手伝いをすることになりました。まちにとってもこの宝物が文化財になることは意義があり、今後のまちのあり様にも影響すると思われ、一軒だけの話ではなく高槻全体の町家を意識しながら作業に取り組みました。このため、過程においては当然（私はそう思っていました）行政も巻き込む形になり、大阪府や高槻市のみなさんにも大変お世話になりました。

数年に及ぶ準備を経て、今夏ようやく審議会の答申に至ったわけですが、一軒の町家を深く掘り下げて調べてみたことで、まちのことをさらに詳しく知ることにつながりました。この町家が今後まちの中でどのような役割を果たすのか、見守り続けたいと思います。

いろいろ気づかされる町家の改修

今、とある町家の一部を改修するお手伝いをさせていただいています。これまで何百年かの歴史の中で、多くの人が住まい、多くの職人さんが手を入れてきたこの町家。その歴史の流れの中に私たちもいるのだと思うとふしぎな気持ちがします。歴史の中になじんでいく作業なので、自己主張を控えます。家の人のお気持ちに沿うよう努め、家の歴史、空間、意匠、構造になじむよう工夫しながら、今の世に必要な性能を実現できるようにする。これって、マチヤ・テラスの活動にも仕事（建築設計）にも通じる大事なことやなぁと、ふと先日も思ったところです。これからもこんな感じでぼちぼちと活動していくつもりです。もしもどこかでご一緒する機会がありましたら、その時はどうぞよろしくお願いします。

最後に

2006年の高槻市景観ワークショップ。お互いに別の輪にいたアルパックS氏とたまたま背中合わせに座る時間帯がありました。その時の「何かイベントやりませんか」という彼の悪魔のささやきが思い出されます。神戸の震災直後、アルバイトでお世話になったアルパック。敷地内だけを見て建築を計画、設計することに疑問を感じていた私にとって、とてもよい経験をさせていただきました。その後も何かとお世話になり、おつきあいは続いています。今後もずっと上と先にいてはるお手本でいてくださるものと期待しています。また、いつも興味深いニュースレターを編集なさっているN姐さん。Facebookでは過日、紙面がキティちゃんだらけになっている夢をご覧になったとか。せめて私のこの拙文廻りだけでもそれが実現していることに淡い期待を抱きつつ筆を置きます。

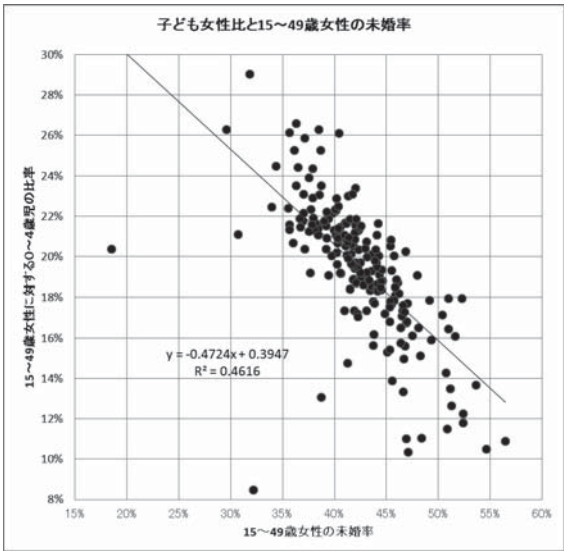
プロフィール：岩崎卓宏
高槻の町家を照らす市民活動マチヤ・テラスの中心メンバーです。本業は建築設計、事務所勤務を経て独立、現在は岩崎建築研究所。昔、アルパックでバイトしてました。
マチヤ・テラス通信：http://fukei.exblog.jp/

地域から少子高齢化への対応を考える
その４～未婚率の低い日高町（和歌山県）に関する考察

／代表取締役社長　森脇宏

未婚率の低い日高町

前号（その３）では、関西の市町村別データをマクロに分析して、女性の未婚率が低い市町村ほど出生率も高いことを確認しました。この分析過程で、日高町（和歌山県）の女性の未婚率が低く、かつ出生率の代替指標である子ども女性比（15 ～ 49 歳の女性人口に対する０～４歳人口の比率）が高いことに気がつきました。下図は前号（その３）でも示した女性の未婚率と子ども女性比の相関を示したグラフですが、子ども女性比が高い市町の多くは都市圏の人口急増市町で、それ故、出産適齢期の若い住民が転入し、それをテコに子ども女性比を高めていると推察されますが、日高町だけは人口減少傾向が続く地方部に位置しているものの、未婚率が低いことをテコに子ども女性比を高めているように見えます。そこで日高町に焦点を当てて、その要因等について考察を深めてみます。

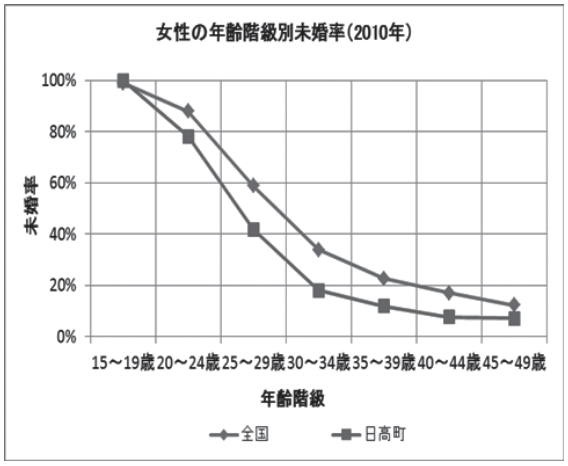


資料：国勢調査（2010 年）

日高町の未婚率の特徴

まず女性の５歳階級別未婚率（2010 年）について、日高町と全国を比べてみました。日高町の未婚率は 15 ～ 19 歳では全国と差はないものの、20 ～ 24歳で８割弱となり９割弱の全国と少し差が生じ、25 ～ 29 歳では日高町は約４割にまで下がって（半数以上が既婚となって）、約６割が未婚の全国と大きな差が生じています。さらに日高町の 30 ～ 34 歳では２割弱が未婚ですが、全国の未婚率が２割を切るのは 40 ～ 44 歳となっています。

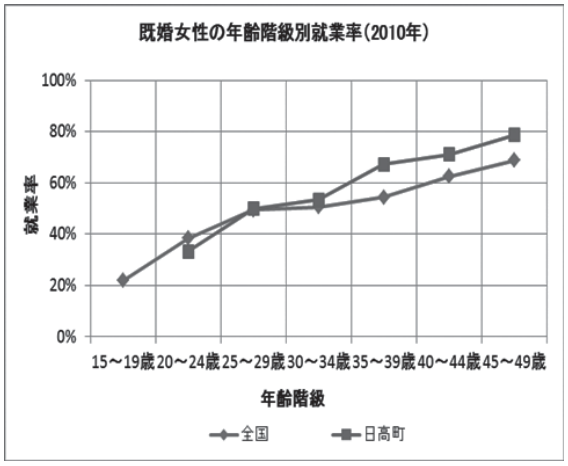
全体として、日高町の女性は他地域に比べて早く結婚しており、これが子供を多く出生する要因となっていると推察されます。



資料：国勢調査（2010 年）

日高町の低い未婚率の要因の考察

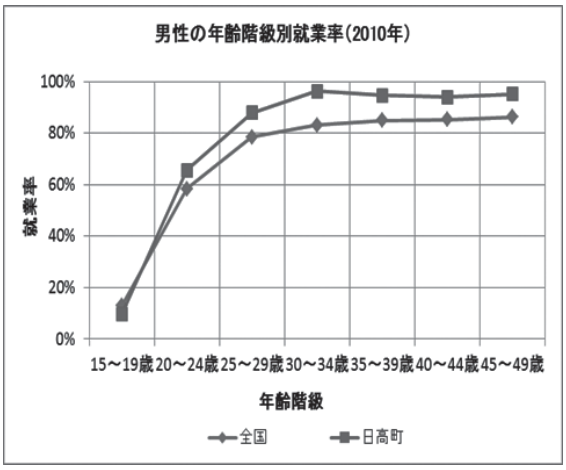
それでは、なぜ日高町の女性は早く結婚しているのでしょうか。そこで、既婚女性の５歳階級別就業率（2010 年）について、日高町と全国を比べてみると、20 歳代から 30 歳代前半までは全国と大きな



資料：国勢調査（2010 年）

差はなく、30歳代後半以降で日高町の就業率が全国を大きく上回っています。すなわち、日高町の女性は全国に比べて早く結婚する要因は、共稼ぎではないようです。ただし、30歳代後半から共働きを始めることが比較的容易なことが、結婚に踏み切る安心感を醸成している可能性も否定はできません。

次に、今度は男性の5歳階級別就業率（2010年）を日高町と全国で比べてみますと、20歳代以降すべての年齢で日高町の就業率が全国を大きく上回っています。日高町の未婚率の低さは、男性の就業状況が優れていることが一因と言えそうです。



資料：国勢調査（2010年）

さらに、日高町における女性の5歳階級別コーホート人口を5年ずらして比較してみました。例えば2005年に15～19歳であった女性は2010年には20～24歳となり、該当する人口は減少していますが、それより年上の年齢階級では様相が大きく変わり、2005年に20～39歳であった女性は、2010年にはいずれの階級も増加をみせています。したがって、20～39歳という子育て世代の女性が、子育て環境として日高町を選択し、転入しているようです。一方、日高町の女性は、20歳代から30歳代前半にかけて大部分が結婚していますので、その結婚を促進する要因は、子育て世代を日高町に呼び込む

日高町女性5歳階級別のコーホート比較

2005年	人口	2010年	人口	増減
5～9歳	190	10～14歳	206	16
10～14歳	198	15～19歳	152	−46
15～19歳	148	20～24歳	87	−61
20～24歳	143	25～29歳	170	27
25～29歳	191	30～34歳	221	30
30～34歳	222	35～39歳	242	20
35～39歳	242	40～44歳	250	8
40～44歳	212	45～49歳	210	−2
45～49歳	218	50～54歳	225	7
50～54歳	263	55～59歳	273	10
55～59歳	280	60～64歳	297	17

増加

資料：国勢調査（2005年、2010年）

要因と共通している可能性があります。この可能性を視野に入れて、もう少し考察を進めてみます。

結婚促進要因として、子育て支援施策を周辺市町と比較してみますと、日高町の保育所利用率（注）が57.3％と、関西の平均である32.2％に比べてたいへん高いことが確認できます。ただし、隣接する由良町も同程度に高いものの、未婚率は低くはないため、保育所利用率だけで日高町の未婚率を説明するのは難しそうです。

そこで、祖父母等による支援に着目し、「次世代育成支援対策地域行動計画」の策定に際して実施されたアンケート結果から把握すると、日高町の就学前児童がいる世帯では、同居世帯が25.3％、祖父近居が69.7％、祖母近居が78.7％と著しく高く、ほとんどの世帯が実家の子育て支援を得られる条件があり、この比率が周辺市町より高いことも確認できます。

こうして日高町では、実家の子育て支援や保育所利用率の高さ、さらに男性の就業率の高さが、総合的に結婚を促進している可能性が考えられます。

なお今回の日高町に関する考察については、できれば日高町の行政担当者のご意見も拝聴すべきですが、そのチャンスはまだ得られていません。

注：市町村別の0歳～6歳児数（国勢調査2010年）に対する認可保育所利用者数（厚生労働省保育課調べ2012年）の比率を「保育所利用率」とします。

上野千鶴子氏との公開対談をしました

竹井隆人／（政治学者、アルパック顧問、(株)都市ガバナンス研究所代表）

先日、拙著『デモクラシーを〈まちづくり〉から始めよう』の刊行を機に、フェミニストとして名高い上野千鶴子氏と公開対談を行いました（詳細は『週刊読書人』2013.10.18号に掲載）。これまでも彼女とのニアミスは幾度かあり、昨年は某大学の連続講座「コミュニティ再考」で前後して講師を務めました。また、小生の前著『集合住宅と日本人』は、彼女と建築学の大家たる鈴木成文氏との対談を収めた『家族を容れるハコの戦後と現在』の後継版として出版社から執筆依頼され、住宅建築に関して上野氏が手厳しく突いた批判をより精緻にまとめたものでした。

いずれにしてもキチンとお目にかかるのは今回が初めてのことで、論客としても名高い彼女のとの対話には多少の不安もありながら、どういう内容になるのかとの期待をもって臨みました。

テーマは新たな拙著の内容についての意見交換のはずでしたが、図らずも共同体（社会）の在り方を巡って互いに譲らぬ討論となりました。その論点の是非について、前から私がフェミニズムについて考えてきたことを〈まちづくり〉と絡めて、披瀝します。

上野氏は拙著について、世を席捲する「仲良しコミュニティ」を批判する箇所に関しては「120％同意」するとしながらも、小生が提唱する「居住区デモクラシー」には強く反対されました。すなわち、居住区〈まち〉にいわば「私的政府」を創設し、それが自己的統治を行い、そこで人びとが政治を修行するのだとの小生のデモクラシー理論に対して“やり過ぎ”との非難を浴びせてきたのです。彼女の共同体に対する捉え方の根底にあるのはマッキーバー式のコミュニティとアソシエーションの二分法であり、これに従えば、自治体や国家、そして私の提唱する〈まち〉といった社会は、自然発生的で当然に人びとすべてを包摂するコミュニティでありますが、これを排して、もう一方の特定の目的のために人為的に組成される部分的なアソシエーションによる社会生成を促せば十分ではないか、との主張されたのです。

しかし、私はこの二分法にそもそも誤りがあり、〈まち〉や国家等の政治的共同体はコミュニティに分類されるものの、同時に“共同生活”を目的とするアソシエーションとしての側面ももつはずと反論しました。本来、アソシエーションであるべき政治的共同体は、選挙の投票行為だけが政治と見なされることで、人びとが政治的なフリーライダーや引きこもりに陥り、それにより惨状を来しているのではないか、と診断するからです。よって、生活に不可欠なものの個人が単独では得られない施設やサービスについて、それを簡便かつ低廉に享受するための“共同生活”を目的とするアソシエーションを、維持していくための政治を人びとに課すことを目論むことを私は表明しました。これに対し、上野氏は著作『おひとり様の老後』を彷彿とさせるが如く、趣味や嗜好、あるいは気質や階層などが共通する者同士での「選択縁」を広げていけば十分という主張に終始されていましたが、この「選択縁」こそ、私の批判する「仲良しコミュニティ」と同質ではないか、と私には矛盾しか感じなかったのでした。

そして、以下はこの対談を踏まえての私の感想ですが、私の主張（アソシエーション論）は、上野氏はじめフェミニズムが抑圧の対象として敵視してきた家族についても適用可能だとも思うのです。フェミニズム（女性解放思想）が、これまで女性が手にできなかった権利や自由を奪還し、その地位を向上させようとしてきたことに私は賛同します。

しかし、そのための強制（義務）からの解放を言い立てるあまり、政治的義務（負荷）を逃れることに問題は潜んでいないでしょうか。私は家族にこそアソシエーションの側面があること、すなわち“共同生活”のみならず“生命の継続”という目的に沿って、家族のために自らが同意した役割をめいめいが果たしていくことに意義があり、それが共同体（アソシエーション）に対する人びとの政治的責務の原点になるようにも思うのです。

授産所の新しい仕事！ 周藤（すどう）さん、遠征して先生になる！

公共マネジメントグループ
／廣部出

覚えていらっしゃるでしょうか。5年ほど前に、京都市伏見障害者授産所とのパートナーシップの下で、新たな事務系作業の授産事業を拓く試みを始めたことを記事にしました（第151号）。

その後、印刷会社さんの協力も得ながらアンケート調査に伴う業務を中心にお願いしてきており、軸になって担って頂いている周藤さんをはじめとする授産所利用者さんも、今ではすっかり職人気質。

さて、今般、私どもで岡山県倉敷市からアンケート調査が大量にある業務を受託しました。安全のため、回収票をあまり移動させたくありませんから、現地で入力等をお願いできるところを探さなければいけません。

そこで思いついて持ちかけてみました。「授産所からセンセイを擁して、ノウハウ移転やってみない？」こういう施設間の交流は、案外に乏しいんだそうです。

トントン拍子に話は進み……

授産所のほうでもパシリと膝を打って施設事業として起案＆お骨折りくださり、岡山市内で就労継続支援B型事業所を運営されている特定非営利活動法人希望の会に、周藤さんが先生となってアンケート調査関連業務について講義に行くことと相成りました。エラーチェック機能を組み込んだ調査結果の入力フォームをつくるのも周藤さんですし、データを入力するのも集計するのも彼が中心。余談になりますが、ネジを小袋に入れる作業をしている別の利用者さんに入力元の回収票を繰ってもらって入力しているそうですが、入力が早くてネジのほうが仕事にならない！とボヤいているとかいないとか。センセイにはうってつけです。

テキは体調管理！

そんな周藤さんですが、岡山市まで行くというのは大変。彼には筋ジストロフィーの疾患があって、移動はもっぱら電動車いす。頭の座りを調整するのにも介助が要ります。外気温が体調にモロに影響しますので、暑過ぎても寒過ぎてもダメ。この遠征で、当日はもちろん、そのあとも体調を損なっては、数日後に控えたKARAのコンサートに行けなくなってしまいます（行って堪能した、とのコト）。季節的にもギリギリのタイミングで、10月22日に講義日程を組んで準備万端。

名講義、開演。

当日、初めて名刺を渡した！という周藤さん。初めてプレゼンテーションソフトを使ったとは思えない、表やグラフも駆使したわかりやすい資料を用意されていて、テレビ局の取材もあるなか、岡山市希望の会特設講義会場でイザ。5年間で培ったノウハウをイチから丁寧に説明します。希望の会の利用者さんたち、「きちんとやれば、ちゃんとお金がもらえる」「これならできる」といった実感が得られたようです。普段はすぐ集中力が切れるという人も含めて、みんな目をキラキラさせています。しっかり聞いて、実際に入力作業をやってみて、質疑応答があって。充実した名講義でした。施設職員さん曰く「みんなこんないきいきした表情（かお）してる、涙が出そう」

帰りの新幹線では、周藤さんも付き添いの授産所職員さんも「ホッとした」「疲れた」を連発しつつも満足そうでした。

おわりに

約5年間、授産所と利用者さん、印刷会社さん、アルパックで一緒になって、小さく実績をつくり積み重ねて、少しずつ社内に拡げながら、業務、成果の品質と信頼、適正な相場をつくってきました。それを、このように別のまちに伝え拡げる力を発揮して頂けたこと、本当に嬉しく思っています。なんだかお礼をいうのも変かもしれませんけれど、関係者のみなさん、ありがとうございました。

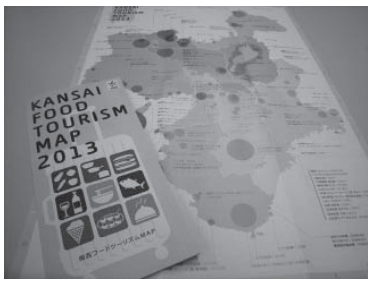
フォーラム「関西の食文化とフードツーリズム」が開催されました

公共マネジメントグループ
／高田剛司

みなさんは、旅行に行ったときに、その土地のおいしいものが食べられることを楽しみの一つとして期待しませんか？

観光目的が多様化してきていると言われて久しいですが、食についても、楽しみの「一つ」ではなく、食そのものが目的化されている観光が増えてきています。確かに、従来から「いちご狩り体験ツアー」や「かにかにエクスプレスツアー」といった類いの旅行商品はありました

フォーラムの様子



関西フードツーリズム MAP

が、最近では、ワイナリーをめぐったり、B級ご当地グルメで有名になったまちに出かけてみたり、農家レストランや古民家カフェでの食事を目的にふらりと旅行に行くことが増えてきていると思われます。

そこでは、美味しさの追求はもちろん、食材の生産地に出かけることによって、その土地の自然や景観を楽しみ、生産者・料理人との交流が生まれ、総合的に「食」を楽しむ観光が成立するのです。

このフードツーリズムについて、おそらく日本で初めてのフォーラムとなる「関西の食文化とフードツーリズム」が9月14日（土）、大阪府立大学 I-site なんばで開催されました。主催は、私もメンバーになっている「フードツーリズム研究会」（主宰：尾家建生氏・山川雅行氏、事務局：大阪観光大学）です。

フォーラムは、尾家先生の基調報告「フードツーリズムの現状と課題」からスタートし、山形県の庄内から特別ゲストとしてお招きした、奥田政行オーナーシェフ（アル・ケッチァーノ）に、「料理が地方を元気にする」をテーマにしたお話を頂きました。

また、大阪の河内でワインツーリズムに取り組むカタシモワインフード（株）の髙井利洋社長、農家レストランで地域活性化に取り組む奈良県職員の福野博昭さんを交えて、パネルディスカッション「関西からフードツーリズムを広めよう」が行われ、会場110名の参加者と一緒に議論が盛り上がりました。

このフォーラムを通じて、私が再認識したことを一つだけ挙げるなら、フードツーリズムは、旅行者の楽しみを広げるだけでなく、その土地で一次産品や加工品を生産する人々にとって、気持ち的にも経済的にも元気にさせる役割があることです。そして、地元食材を理解し、使いこなせる料理人の存在が鍵であることも実感しました。

感想をお聞きしたら、参加者の皆さんも非常に満足されたフォーラムになったようです。当日は、研究会で作成した「関西フードツーリズム MAP」を配布し、「フードツーリズム宣言」も発表しました。残念ながらこの紙面では紹介しきれませんので、フォーラムの様子については、フードツーリズム研究会の HP をご覧ください。フードツーリズムマップもこの HP からダウンロードできます。

http://www.foodtourism.jp/

＜フードツーリズム宣言＞

1．フードツーリズムは、地域ならではの料理を味わうことを求める観光形態であり、土地の味覚を通じて、歴史や文化、景色なども体験し、地域の人々のライフスタイルにふれる旅行スタイルです。

2．フードツーリズムは、観光と味覚の成熟から生まれた新しい観光、ニューツーリズムです。

3．フードツーリズムは、地域にとってその土地の食材と調理による美味しい料理を旅行者に提供することにより、地域の良さを再認識することにつながります。また、このことを通じて、地域経済の活性化にも貢献できます。

4．フードツーリズムは、都市と地方の暮らしを相互に豊かにします。

私たちはフードツーリズムをさらに広め、地域の振興につなげていきたいと思います。そのため、フードツーリズムの情報収集と情報発信に努めます。

5．フードツーリズムを全国に広め、日本の食文化を高め、魅力ある観光立国日本を目指しましょう。

平成25年9月14日　フードツーリズム研究会

きっかけは、地域自慢を見直すこと

地域再生デザイングループ／森岡武

兵庫県三田市の玄関口、JR三田駅前を会場として開催される三田バルは、今年3年目をむかえ、10月12日（土）に開催されました。まちの賑わいを取り戻そうとするイベントとして徐々に定着しつつあります。

この駅前を含む本町、屋敷町とよばれる中心市街地では、賑わい再生に向けたアイデア出しに余念がありませんが、何から始めたら良いのか打つ手に困り、結局動けないというジレンマに陥っています。そこで地域の自慢から見直そうと始めたのが、三田バルの日にあわせて企画・実践した「三田まちなかふぇすてぃバル」です。

だんじり祭りを展示する、幻の三田城を復元する、建物として雰囲気がある自慢の公民館を使う、ガイドツアーでまちなかを練り歩くといったもりだくさんの内容で、「地元発意で無理なく続けられること」をポイントに企画しました。

だんじり祭りは、祭りの前日からカメラマンが入り込み、ひたすら写真を撮り、撮った写真

カブリモノで変心！

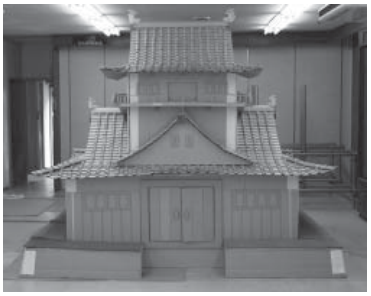
を地域で展示をしました。

幻の三田城の復元では、地元の建築家が図面を起こし模型・試作をつくり、地元の段ボール事業者から段ボール板を300枚無償提供いただき、子どもと一緒に仕上げを行いました。

公民館では1枚の紙からカブリモノを作り「変心」するワークショップを開催しました。女性は普段、お化粧で変身しているので、ハマるのは変身に飢えている子どもと男性でした。このまちも変身を求めています。

今回の目的は、外への発信ではなく、地域に暮らす人が地域を見つめ直し、会話をし、「考えてまちを使う」ということです。手伝ってくれる人に声をかけ、自ら空き店舗・空き家の所有者に話しをし、自分たちで取り組みたいことをまとめる。きっかけは小さな動きですが「続けよう」「次は何？」といった声があがり始めました。次は3月に予定している「おひなさまロード」でお出会いしましょう。

子どもと一緒に城づくり


復元した幻の三田城

エネルギーシフトと地域づくりを訪ねる旅

代表取締役会長／杉原五郎

10月12日（土）より20日（日）まで、中同協（中小企業家同友会全国協議会）主催のドイツ・オーストリア視察に参加しました。スイスのチューリッヒに現地集合し、ドイツのフライブルグとミュンヘン、オーストリアのウィーンとツヴェテンドルフ・ギュッシングを訪れました。

環境首都・フライブルグでは、土木工学を学び、都市計画・まちづくりを専門にしている村上敦さんの案内で、フライブルグでの環境・エネルギー政策を中心に、都市計画、住宅政策、都市交通政策、地域産業政策、社会政策を統合的に進めている実践事例について深く学びました。ボーバンという有名な住宅地を実際に歩いて、環境先進都市のすばらしさを実感しました。

ミュンヘンでは、市の産業労働部門の担当者から、エコプロフィット事業（環境経営の取り組み）について、その目的と経緯、成果などについて説明を受け、環境経営の実践事例として14世紀にできたビール工場を見学しました。ドイツ在住のジャーナリスト熊谷徹さん（元NHK記者）から、ＥＵの中で一人勝ちするドイツ経済の実情と中規模企業（ミッテルシュタント、従業員500人未満）がドイツ経済の中で果している役割についてレクチャーを受けました。

フライブルグ市（ドイツ）のボーバン住宅地

オーストリアでは、首都・ウィーンからバスで2時間ほどの所にあるツヴェテンドルフの原子力発電所を視察しました。ここは、1972年に建設に着手して、1978年の国民投票において157.6万人の賛成、160.6万人の反対という僅差で、完成した原発の稼働を取りやめた所です。原発の炉心や圧力容器の中をつぶさに見て回るという体験ができました。

最後に、オーストリアの南部にあるギュッシング市を訪れ、バイオマス(森林と牧草)を活用したエネルギーの地産地消と地域経済活性化の取り組みについて関係者から詳細な説明を受け、現地の施設見学と地元市長との会見が実現しました。ギュッシング市は、人口4000人にも満たない小さなまちで、オーストリアの中でも最も貧困な過疎地域でしたが、バイオマス発電や地域暖房の取り組みを通じて、「ギュッシングモデル」といわれる成功事例のまちとして有名になりました。ちなみに、ギュッシングは、最近出版された「里山資本主義」（藻谷浩介著、角川新書）に詳しく紹介されています。

全体として、今回の視察テーマは「エネルギーシフトと地域づくり」であったと実感しています。それは、フライブルグ市に典型的なように、化石燃料に依存した従来のエネルギー政策から再生可能エネルギーへのシフトを、単

ギュッシング市（オーストリア）の
バイオマス施設の見学

なるエネルギー面での転換にとどめず、都市計画・まちづくり、住宅政策、交通政策、地域産業政策、社会政策との関連を含めて、戦略的、統合的に進めている点が印象的でした。エネルギーシフトを推進していくためには、草の根からの市民運動、国および自治体の政策、それを担保する政治の力、これらの３つが大切ですが、案内をしていただいた村上さんに、もっとも重要なのは何かと質問したところ、草の根からの市民運動であるとの回答でした。地域を変えていくのは、住民・市民の熱い思いと粘り強い取り組みであると改めて痛感しました。

今回の視察は、中同協による３回目の視察でした。2008年のブリュッセル（ベルギー）とヘルシンキ（フィンランド）視察は、「Think Small First（小企業を最優先に考える）」EU小企業憲章がテーマでした。2010年のワシントンとニューヨーク視察（米国）では、「Mind Shift（小企業中心に政策の力点を変える）」米国の中小企業政策を学びました。そして今回の視察は、私にとって「エネルギーシフトと地域づくりを訪ねる旅」となりました。

アルパックの経営理念を策定し、イメージロゴも作成しました

代表取締役社長／森脇宏

アルパックの経営理念

一昨年の東日本大震災以降、社会と地域のあり方を大きく変革していくことが求められ、こうした地域社会のニーズに対応し、地域づくりに積極的に貢献していくため、次のようにアルパックの経営理念を策定いたしました。今後は、この経営理念にもとづき、より一層、地域社会に貢献していきます。

（１）アルパックの社会的使命“持続可能な地域づくりへの貢献”

（２）アルパックの将来像

“地域づくりの多様なモデルの創造を通じて、日本の地域づくりをリードする”

（３）アルパック所員の行動規範

①情熱（ロマン：持続可能な地域づくりの多様なモデルを創造するため、積極的にチャレンジしていきます）

②継続（ビジネス：自らの努力と顧客等に支えられて事業性を追求し、経営革新を担っていきます）

③職能（プロフェッション：自らの専門性を高め、多様な専門家とも連携して、優れた提案や実践を積み上げていきます）

④連携（コオペレーション：社内の協力はもとより、ステイクホルダーや協力会社等と協働して取り組んでいきます）

イメージロゴの策定

アルパックの経営理念の策定とあわせて、下図のようにイメージロゴも策定しました（表紙にもカラーで掲載）。

デザインのポイントは次の３点となります。

①英語標記の頭文字を小文字とし、Architects, Regional Planners, Associates, Kyotoが１つの単語のように一体となった集団を表現しています。

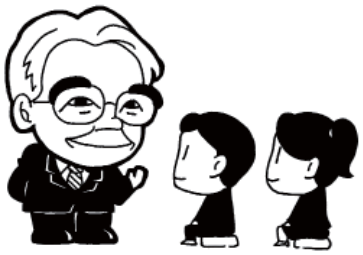
②a,p,aの３つの文字に重ねている！（エクスクラメーション）は、Architects, Planners, Associatesの３つの主体がそれぞれ創造的な驚きを生み出すことを表現しています。

③３つのエクスクラメーションは、さらに経営理念の「社会的使命、将来像、行動規範」や、「現地主義、実証主義、総合主義」「シンクタンク、プランニング・コンサルティング、アーキテクト＆ランドスケープ・デザイン」「ひと、まち、地域」「提案力、実行力、発信力」など、アルパックが大切にしてきたコンセプトも表現しています。

今後、所員の名刺をはじめとして、封筒などに順次ロゴを入れていく予定ですので、よろしくご愛顧ください。

arpak

「創始者に聞く」



＜年表＞
1954・昭和29年（23歳）：京都大学卒業 / 大学院入学
1957・昭和32年（26歳）：一級建築士取得
1958・昭和33年（27歳）：川村建設事務所入社
1963・昭和38年（32歳）：建築学会のソ連・東欧調査に参加
1965・昭和40年（34歳）：万国博調査・会場計画（出向）
1967・昭和42年（36歳）：2月アトリエ・アルパック吉田山山麓に開設
8月株式会社地域計画建築研究所設立
1969・昭和44年（38歳）：隠岐・西郷町総合計画策定
1970・昭和45年（39歳）：大阪万博開催

アルパックニュースレターは創業17年目の1983年の発行以来、本号で182号を迎えました。この間、読者のみなさまをはじめ職員の世代交代も進み、アルパックの歴史を知る人も少なくなってきました。そこで、創始者である三輪泰司名誉会長が語るアルパック創始期以来のエピソードを連載でご紹介します。若手職員が順に聞き手となってインタビューする本企画をお楽しみください。

◆ ◆ ◆

―現在、私は25歳でいま何を学ぶべきか日々考えています。25歳くらいの頃はどのようなお仕事をされていたのですか？

僕が25歳の時は、西山研究室の先輩と共に大規模団地の先駆けとなった香里団地計画に参加し、スキルアップに勉めていました。建築士の受験をしたのもこの頃です。

さらに当時の住宅需要に応えて、京都住宅相談所を開設しました。城崎温泉の仕事も手掛け、建築設計の実績も積み重ねつつあったのですが、西山先生から見ると、僕らは設計のプロとしての教育を受けていなかったので「見ちゃおれん」というレベルだったようです。

そんな訳で、東大の吉武研究室の外郭団体である川村建設事務所に修行に出されまして、設計から見積の仕方、施工までを経験しました。特許技術の開発に関しても、先駆けて取り組んでおり、私も2つほど特許を開発しましたよ。

―何の特許ですか？

ドライブリベット工法についての機械的な特許と、金属材料の特許です。金属材料の勉強は随分やりましたよ。このような基礎的な技術のスキルアップを勉強するのが20代でしょう。東京で足かけ6年過ごし、和設計事務所では社会福祉施設や児童施設の業務も経験しました。

この後に「地域コンサルタント」設立へ向けて、建築学会の調査団の一員としてドキシアディスの手掛けた都市や、ソ連、ヨーロッパを訪れました。

―ソ連、ヨーロッパの都市はかなり先進的だったのでしょうか？

そうとも言えません。画一的なプランだったし、技術も高くはなかったですね。ただしスウェーデンなどは面白かったですよ。ストックホルムからは「橋上駅」の方法を学び、泉北ニュータウンに取り入れました。

ところで、この時期は日本でも住宅公団等により大量に住宅が供給されていました。建設に伴う技術開発などハード面では目覚ましい進展がありました。しかし、ハワードの『田園都市論』で語られているような、土地の共同所有といったソフト面が入ってこなかった。これは業界では日本の都市計画の失敗と言われています。

この後大阪万博の会場計画が始まり、300haのマスタープランの策定や土地造成の設計を手掛けました。また、世の中が万博景気で浮かれていたその一方で、それだけでは不十分だと思い、万博景気の対極を見ようとも努めました。

―「万博景気の対極を見ようとした」とは？

代表的なのは隠岐・西郷町総合計画です。当時、過疎と過密の問題が明らかになりつつあり、隠岐でも年率10%で人口が減少していました。

私たちは「島に住む3万5千人の人間が食っていけるには何をすれば良いか」を考えました。空港や港の整備に加え、混牧林での牛の放牧、村営ホテルの建設、公務員人員の増員などにより、雇用の場を創出しました。

さらに社会科の教科書を作ったり、隠岐に歌い継がれていた民謡を集めたり、「しげさ節（隠岐民謡）」に振り付けをして皆で踊れるようにしたり…最後には「港まつり」を催しました。

誰でも自分の住んでいる所の意味を知り、誇りを持ちたい、より良くしたいという思いがあります。これは個人が自分自身に誇りを持ち、より良くしたいと思いを持つのと同じです。地域づくりと同じように、個人としても「何をやりたいのか」を考え、自分のアイデンティティ作りをしなければなりません。

◆ ◆ ◆

＜インタビュアーの感想＞

入社して半年が経ちますが、「この先自分はどこへ向かうのだろう？」という思い（不安・期待）があります。日々「今の自分に何ができるか」を考え、もがきながらも、「生涯で何をやりたいか」を見定め、近づけるよう努めていかなければならないということを、三輪さんのお話を通じて強く感じました。

インタビュアー：地域産業イノベーショングループ　片野直子

何気ない「聖地」・西宮北口

都市・地域プランニンググループ／坂井　信行

宗教的な意味合いで神聖視されている場所を「聖地」といいます。いわゆる総本山。「聖地エルサレム」とか「聖地メッカ」とか。最近ではパワースポットという言い方もあります。聖地という言葉は他にも「高校球児の聖地・甲子園」「オタクの聖地・秋葉原」といった使い方もします。また、映画やアニメの舞台となった場所や著名人にゆかりの場所なども「聖地」と呼ばれたりします。

アニメの舞台となった場所は「アニメの聖地」と呼ばれ、全国各地にあります。アニメファンにとって、こうした「聖地」をめぐる「巡礼ツアー」は大きな楽しみでしょう。西宮市出身の谷川流原作の人気アニメ「涼宮ハルヒ」シリーズには、西宮市内の実在の場所を連想させる場所がたくさん登場し、それらの場所は「聖地」となっています。特に阪急西宮北口駅周辺には「聖地」がたくさんあります。

「いつもの喫茶店」カフェドリーム

写真の場所は北西出口を出たところのまちかどです。アニメでは主人公のキョンが自転車を「不法駐輪」する場所。ちなみにアニメの中では右側の角のビルに銀行が入っているのですが、残念ながら（？）今年の春に移転してしまいました。他にも北口駅（西宮北口駅）北側の改札出口は涼宮ハルヒ率いるSOS団のメンバーが待ち合わせに使った場所、そして近くには「いつもの喫茶店」もあります。この喫茶店のモデルとされる「珈琲屋ドリーム」は、この界隈でもアニメファンの間で特に人気の高い「聖地」となっているようです。

これらの「聖地」はどれも一般の人にとってはおそらく見過ごしてしまうにちがいない何気ないまちかどです。それがハルヒファンの目には特別な「聖地」と映るのです。でも「聖地」とは本来そのようなものだと思います。普通のまちかども見方を変えるだけで輝かせることができます。「聖地」はその典型といえるのではないでしょうか。

arpak アルパック(株)地域計画建築研究所
Architects　Regional　Planners & Associates・Kyoto
http://www.arpak.co.jp　E-mail info@arpak.co.jp

この用紙は「びわ湖の森を元気にする」Kikitoペーパーを使用しています。

本　　社
京都事務所　〒600-8007　京都市下京区四条通り高倉西入立売西町 82　TEL(075)221-5132　FAX(075)256-1764
大阪事務所　〒540-0001　大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP プラザビル 15F　TEL(06)6942-5732　FAX(06)6941-7478
名古屋事務所 〒460-0003　名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 6F　TEL(052)202-1411　FAX(052)220-3760
東京事務所　〒102-0074　東京都千代田区九段南 3-5-11 スクエア九段ビル 1F　TEL(03)3288-0240　FAX(03)3288-0221
九州事務所　（株）よかネット　〒810-0802　福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F TEL(092)283-2121　FAX(092)283-2128